



「心理学講座」第7回配本附録

東京都神田局区内神保町 2 の 24 電車通り 株式会社 中山書店



入社試験の季節

堀川直義

「心理学講座」この回が配本される十月は、各会社の入社試験たけなわのシーズンだと思う。そして私もまた一室にカンヅメになつて採点に苦労しているところであろう。入社試験期がめぐりまとることに、毎年思うことであるが、こんな試験の方法で、果してほんとうに立派な人材を選びうるであろうかという疑問をもつ。

作業能率の増進や、適材配置、労務管理などにだんだん心理学が進出していることはうれしいことだが、その出发点ともいふべき採用試験に、もつと心理学が導入されてよいと思う。高等学校や大学の入学にはすでに進学適性検査が適用されている。一部では「あんなことで進学の適性がわかるか」といふ人もあり、一時賛否両論で新聞を賑わしたこともあるが、一応勝負はついた、というかたちである。SAT否定論者のいい分は、いわば昔の方がよかつたという感情論にすぎないが、賛成論には心理的な裏づけがある。まだまだ改良の余地はあるが、寒暄以来すでに八年、入試時のテスト成績と、

ろう。公務員の選抜については、人事院では心理学的な研究が行われ、国鉄、電電公社なども独自の検査方法を進めつつあるし、外交官試験では、その面接試験に新しい討論検査(Group Discussion Test)を採用している。営利会社の経営者は、確實に利潤のあがる施設などには新しいものを導入するけれども、ただちに利益の効果が見えぬ新制度の採用となると、わりに保守的なのではないか。

自由国民社の入試問題集から拾うと、外国语の試験をやった会社は二百五十社中百五十社もあるのにケレベリン検査をやった会社はわずか十五社、AT四社、性向検査一社、という具合である。外国语ができるということと、入社後の成績と、どれだけ相関があるかは知らないが、特に外国の言葉を用いる部門以外では、外國語の力と業務成績との間には大きな相関はないのではないか。いやしくもその目的でつくられた適性検査よりは相関係数は低いと想像される。

朝日新聞社の入社試験にも、フレイドの「Test」

入学後の学課成績との相関を十二分調査する期間を経過している。各種の報告を見ても、学会のシムボルームを聞いても、少くとも進学の不適格の選別については十分その予診性が認められるようである。

では会社の入社試験にはなぜこ

Series for Journalistic Aptitude の中
かで、焼か直しの縫が出来たことが二
回あるけれども、系統的テストの一環とし
て出されていないので、あまり意味はない
ようである。読売新聞社では、この二
年間、心理学者の協力による二十項目ほど
の質問を織り込み、受験者の性格分類を行
っているようだが、本年は、同じ新聞記者
でも、外勤記者と編集者は能力と性格が
異なるとして、べつべつのテストを行うとい
う。そういう結果が出るかと楽しみにして
いる。

大体、採用試験が適正であったかどうか
を知るために、採用試験における各項目
と、採用後の成績との関係を「あとづけ」
しなければわからない。單に採りつけなし
では、従来の採用形式を墨守する根拠には
なるまいと思う。さらにそれ以前に、その
職種には、職務遂行上、いかなる特性が必
要なのか、それが分析してないと、将来の
勤務成績を予測するに足る試験問題の構成
が困難である。工員などの現場の職務は別
として、大部分の会社では、大学卒業者を
もつてある職について、職務分析表さ
えてきていな。したがって、試験問題の
一題一題を見ると、これは一体、受験者の
いかなる能力を評定しようとして出題して
いるのか、理由もわからぬ問題が多い。そ

かで、焼か直しの縫が出来たことが二
回あるけれども、系統的テストの一環とし
て出されていないので、あまり意味はない
ようである。読売新聞社では、この二
年間、心理学者の協力による二十項目ほど
の質問を織り込み、受験者の性格分類を行
っているようだが、本年は、同じ新聞記者
でも、外勤記者と編集者は能力と性格が
異なるとして、べつべつのテストを行うとい
う。そういう結果が出るかと楽しみにして
いる。

して問題全体を見ても、受験者の特性全部
が見渡せるような統一的構成に欠けている
のである。

試験問題は、いつもじゅんじゅん妥当性 (va-
lidity)・客觀性 (objectivity)・適応性 (ad-
equacy)・信頼性 (reliability) の四拍子が
そろっていなければならぬが、第一の問題
の妥当性という点では、一流大企業の問
題を見ても、まことにあやしいものがあ
る。

第二の客觀性については、最近はだんだ
んよくなっている。マル・チョイ (multiple choice) 式や補充法が応用され、
A の試験委員が採点しても、B が採点して
も、点数に上下ができるというようなこと
がなくなってきた。しかし折角出題の客觀
性が確保されても、問題の妥当性の方が忘
れられているので、いたずらに「詰の泉」
や「二十の扉」「私はだれでしょう」式の
難解なテストに流れがちのように見える。
採点者の主観で、どうにもなる問題が少
くなつたのは、ともかくも進歩であるが、
面接試験となると、依然として主觀的採点
が多いようである。どこの会社でも、面接
試験は重役や幹部がこれにあたる。多年の
経験から人物を見抜く上に相当の自信をも
つてゐるらしい。しかしこれはなんといつ
ても主觀的評価だし、十五分や二十分の問

答で客觀的評定は困難だと思われる。

近頃チフインの Industrial Psychology
などを見ても、アメリカの採用試験や採用
後の管理方法は多いに学ぶべきものがあ
る。また採用試験専門の面接法としてはフ
レーザーの A Hand-book of Employment Interviewing などが利用されてい
る。

我田引水のようだが、採用試験には、も
っともっと心理学を導入すべきだと思つ。
丁度入社試験のシーズンなので、ちょっとと
言ふ。(朝日新聞調査研究室員 上智大講師)

医学博士 勝木新次著

価三五〇円 十三〇円
法 医 学 生

日本医学博士会員 古畑種基著

価三五〇円

本書は外国の資料よりも、わが國
のものを多く用いて、日本人の生活
を具体的に取扱うことによりされた
特徴のある著書で、衛生学に關係せ
るもの人々が熟読されることを切望す
る。(慶應大教授原島進博士評)

法 医 学 入 門

最新刊 A5判箱入上巻
価三五〇円

日本医学博士会員 古畑種基著

価三五〇円

手相の話

古畑種基

わたくしはこのごろ傑出した人の手の研究をしようと思つて、手の型を集めている。先日、尾崎行雄先生の手の型をとりにいったことが、新聞に出たので、世人の中にはわたくしが手相の研究をしているよう思つてゐる人があるようだが、これは間違で、わたくしはまったく別のことを研究しているのである。しかし、手の研究をしているうちには、自然手相に関することもやらねばならぬようになるかも知れぬ。それで簡単に手相のことをここで述べてみよう。

手相を見るといえど、大抵の人は馬鹿にするのは東西その軌をひとしくしていといてよい。外国では、手相見はジプシーの女と相場がきまつておらず、日本では縁目や駅に近いうす暗いところで提燈をつけた売卜業者の仕事となつていてよい。これらの大部分はでたらめであると信ぜられてゐる。しかし、手相といつても運命の判断をしたり、職業の選択に使われたとは限つてない。手相学の沿革は古い。紀元前ギリシアの哲人アキラゴスも研究したと伝えられ、ポートウ、アリストテレスも熱心なる研究家であったという。アリストテ

レスの「ヒストリー・オブ・アニマルズ」の中に「手は諸器官中でもっとも大切な器官である」「手の線は原因なくして現われたものではない。元來の感化力と個性によつてできるのである」と書いているそうだ。

手相学には、三種類ある。その第一は手の形から性格を判断する「キログノミー」(chirognomy)、第二は手の比較研究をする「キロソフィー」(chiroscopy)、第三は手の紋理について古い禪掌術すなわち「キロマンシー」(chiromancy)である。古代から一般に行われているのは、この第三の「キロマンシー」であつたが、今日は「キログノミー」と「キロマンシー」を一つに取りまとめたものを研究しているのである。

「キログノミー」は一四八三年ダルペニチー(D. Arpentigay)によつて組織的に研究せられ、「キロマンシー」は一八五九年デバロール(Desharrolles)によつて大いに発展せしめられた。英國のキロ氏、米国のベンハム氏は近代的手相学者といわれる、英米において盛名をはせている。キロ氏は第一次歐州大戦に備へたたたキッチャーノ元帥の功勳と非業の死を二十年前に予定したといふことで有名である。ベンハム氏は一三才の頃、ジプシーの老婆に「キロマンシー」の初步をさずけられて興味を覚えたが、その後多数の人の手をみて研究していく

ため、医学校に入つて医学を学んだ。ところに生理学を専心研究し、健康が人の氣質や性格に大きな影響を与えるものであることを知り、これを手の研究に結びつけたのであつた。彼の著「The Laws of Scientific Hand Reading」は医学者の見地に立て書かれたものであるという。

オハイオ大学の総長、ジェームス・エイチ・キャンブィールド氏は「私がベンハム氏に逢つまでは、手相などといふものは愚人をまどわす迷信にすぎないとついていたが、私の眼に影じた彼は、高い教養と名声を有する立派な紳士であつて、その静かに、しかも注意深く研究せられている手相学は、経済学や神学と同じ価値のある學問である」と書いているのである。

さて、わたくしの現在研究している手掌紋の研究は、前述の三つの研究のいずれにも属しない別の研究である。指先きの皮膚の隆線の走り方を研究するのが「指紋学」DactyloscopyまたはDermatoglyphicsであるが、手のひらの方にも指先きと同じような皮膚隆線の走行によってできている紋理がある。この紋理を研究するのが手掌紋学であつて、指紋学が科学であるようにこの掌紋学もまた立派な科学なのである。わたくし達はこの掌紋の民族的相違を人類学的に、その遺伝性を遺伝学的にしらべ、この原理を応用して、親子鑑別上に新らしい道を開拓していくのである。

（東京医科歯科大教授医学博士一六、七、八）

読者ペジ

応用心理学を専門とするわれわれにとつては非常に有用な参考書だと思います。しかもこうした心理学者の者にとって、医学、生理学を含めたこの講座は特に貴重なものといえます。

函館市染川町 官吏 菅崎 昭夫

まことに結構な企画だと考えますが、欲をいえば、生理学講座と同様に横がきにしてはしかったと思います。なぜならば挿入された外国語や数値がよみにくい。これは横書きに馴れている私が特に感するのかも知れませんが……しかし内容は大いに満足です。完結の一日前からん事を切望します。

東京都新宿区 学生 佐野 吉彦

矯正職員として心理学の勉強をこじらざしました矢先、この講座の発刊を知り、毎回熟読しています。これによって心理学の全分野を知りうることは、初学者の私にはこの上もない喜びであり、将来への光明でもあります。

佐賀県佐賀郡 矯正職員 東島 一昭

精神医学と心理学の接近がますますいち

じるしくなった今日、各方面に応用される心理学が、この講座によって、その全体が細部にわたり、編集されていることは誠に好都合な良書であると思います。

講座だよりも二、三希望がのべられたと思いませんが、できうべくんば諸外国の心理学界の在り方も紹介していただければこの上もないよろこびですが……。

北海道空知郡三笠町 教員 和野洋一

今まで幾多の心理学叢書をよみました。が、どこかに飽きがきて最後まで読破できなかつたが、この講座はその点、つぎつぎと飽きることなく心を落ちつかせて読ませる力をもつていて非常に嬉しく思います。

宮城県大沢村 教員 庄子 仙城

編集部から

燈火したしむ読書の秋となりましたが、読者のみな様御元気ですか。心理学講座もいいよいよ今回で全巻の後半に入りました。

みな様方からよせられました愛読者の方々が編集部の机上に山積しております。御批判や御感想の一つ一つがこの講座の血となり肉となつて、さらに充実した内容をもつてみな様の御支援に答えるべく懸命の努力をつづけております。

心理学講座

第八回配本 内容

耳

日本放送協会 黒木総一郎
芸術大教授 医学博士 堀田琴次

聴覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

聴覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

感覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

聴覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

感覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

食

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

老衰

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

行動

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

スボ

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

健康の意味とその保持

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

尾島碩心

耳

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

聴覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

情意実験法

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

視覚

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

行動

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

老衰

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

行動

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

老衰

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

行動

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

老衰

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

行動

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

老衰

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

行動

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次

老衰

日本放送協会 黒木総一郎
教育大教授 医学博士 堀田琴次